

## 特集 文部省科学研究費補助金〔研究公開費〕による一般公開シンポジウム 「よりよい未来のためにー自然共生型社会への途」

日本環境教育学会、初の公開シンポジウムについて

渡辺隆一（企画委員会事務局長）

日本環境教育学会による初めての一般公開シンポジウムが、平成7年11月11日、東京、お茶の水スクエアにて、文部省科学研究費補助金〔研究公開費〕によって開催された。最近の環境教育への関心は極めて高いが、同時に多くの環境教育関連の集まりがこの時期に集中しており、当初は参加者数が心配されたが、幸い150名もの方々をご参加くださり、午前の講演、午後のワークともに好評の内に無事終了することができました。ここに、本企画の意図と進行を紹介すると共に、ご協力いただいた多くの方々に厚く感謝を申し上げます。

日本環境教育学会は94年に文部省に対して、本シンポジウム開催のための補助金を申請していた。目的は〔地域から地球規模まで環境問題が深刻化していく中で、人々の未来に対する不安が増大している。このような時期に、人類の将来を科学的に予測しながら、破滅を迎えないためにはどのような社会を作っていくことが望ましいのか、環境教育の視点から提言を行う〕ことである。今年度初めに、当学会に対して上記補助金が交付されることが通知され、5月の第1回運営委員会において、シンポジウムの企画、運営を企画委員会が担うことになった。早速に企画委員会の意見、アイデアを集約し、7月の第2回運営委員会に企画案を提出。総合テーマを〔よりよい未来のためにー自然共生型社会への途〕とし、午前は主に日本環境教育学会の運営委員による提案型講演〔環境教育の質的発展をめざして〕、午後は会員外の関連領域の人たちにも協力して頂く参加型パネル討論〔環境教育のひろがり、可能性と協同をさぐる〕とする事を決定した。また、関東地区の学会員数名に特別委員となってもらい、実際のシンポジウ

ムの企画、運営事務にあたってもらう事とした。学会メンバーの日頃の研究成果を公開してもらう午前の部の提案型講演は7月末には演者、テーマが決定した。8月には、フロアーも参加してもらえる討論会を開催すべく、討論の中身や形式等が企画の準備段階から演者全員で作るという、企画過程そのものを環境教育的に行ってみる新しい形のプロジェクトを考え、日本環境教育学会外の関連領域の方々に協力の要請を行った。幸いにも、多くの方々が午後の部の企画検討会にまさにボランティアとしてたびたび参加して下さった。いく度かの検討、模索の中で最終企画案ができたのはシンポジウム直前の10月末日であった。さらに、ワークのための具体的マニュアル作成や会場準備が当日まで多くの若手の方々の協力によって続けられた。

当日のプログラムは以下のようです。

1部：9:30-12:30 提案型講演〔環境教育の質的発展をめざして〕

基調報告。自然共生型社会への道ーわが国の環境教育の現況とその問題点ー

柴田敏隆

環境教育をヒトの原点で考える

山田卓三

都市におけるフィールドワークのこころみ

小川 潔

環境変化の新段階と「持続可能な社会」ー統合的  
環境教育の重要性ー

和田 武

環境教育・研究における情報利用のための援助

中山和彦

環境教育における“いのち”と“心”の棲み家

谷口文章

豊かな人生のために

金森正臣

それぞれの実践的かつ専門的な話は短い時間で

あったが密度の濃い話となり質問も活発であった。多方面の話が一度に聞けて良かったという感想が多かった。

昼食の時間後半には環境教育スライド【一本の木】と【環境教育のいろいろ】を上映した。

2部：13:30-17:00 ワークショップ【環境教育のひろがり、可能性と協同をさぐる】

環境教育および隣接領域（ボランティアセンター、海外援助NGO、小学校）の現場実践者からの問題提起を3名の方からいただいた。福祉や遠い外国の事など、普段は環境教育とは違うと思われていたことも、自然や社会のあり方を考え、よりよい未来をめざす点でお互いに限りなく近い活動なんだと言うことが理解された。その後、参加者全員によるワークショップを行った。まず参加者の気持ちをお互いにリラックスさせるいくつかのゲームによるアイスブレイク、そして本番の環境教育地図作り、ふりかえり、わかちあい、と短い時間ではあったが参加者が十分にそれぞれの意見と力を集めての楽しいワークとなった。その成果は素晴らしいマップや感想文にたっぷりと反映されている。2部企画の作成、運営に参加、協力していただいた以下の方々に感謝致します。唐木理恵子（練馬ボランティアセンター）、磯田厚子（JVC）、田中敏久（学校教育ネットワーク）、村上千里、中島明夫（日本リサイクル運動市民の会）、内山真義（千葉県職員）、高野孝子（エコクラブ）、樋山千春（こどものじゃんぐる）、渡部智暁（筑波大学）、山本徹、大山直美（エコリーグ）、黒岩淳（ワークショップミュー）、中沢知生（アルマジリジウム）、大島英樹（東京大学）、林浩二（千葉県立中央博物館）、原子栄一郎（東京学芸大学）、上田啓子（東和大学）、森良、安達美智子、竹内美保子（エコム）、荒井謙一（環境教育トレーナー研究会）、小川達巳（板橋区立エコポリスセンター）ほか。また、本シンポジウムの企画検討会の会場提供等、多くのご協力をいただいたジャパンエコロジーセンターに感謝致します。

学会として初の公開シンポジウムでしたが、関係者の協力により無事、成功の内に終了できました。今後とも機会があれば各地方でこうしたシン

ポジウムが順次開催できれば環境教育のより一層の普及につながるのではないかと思います。今後の発展に期待が持てた。今回のシンポジウムは多くの方々の協力があってはじめてなし得たものです。再度、皆様方に深く感謝致します。それぞれの講演要旨および問題提起を以下に掲載し、報告とします。

#### ◇基調報告

##### 自然共生型社会への道

—— わが国の環境教育の現況とその問題点 ——

柴田敏隆（コンサーベイショニスト）

最も時間を護りそうもない人物と目されているようですので、時間を厳守します。（笑）

最初にこのような光栄ある機会を与えてくださった沼田真会長に篤く御礼申しあげます。そもそも、私をノミネイトしたのは学会の企画委員の渡辺隆一委員長です。「誰か基調報告をやらないか？」と言われたとき、皆だまりこくっていたので、委員長が、「お前はいつも野山かけずり廻って、いろいろやっているようだから、こういう機会にやりなさい」と言われ、そのときに戴いたテーマが、「わが国の環境教育の現況とその問題点」でした。

でも、今日のプログラムでは、「自然共生型社会への道」です。これはひとえに私の連絡不行き届きに依るものです。お許しください。そこで、「わが国の環境教育～」を副題としてお話しを進めたいと思います。

私の所属が日本自然保護協会となっています。役員のひとりではありますが、常勤してはおりません。そこで最近ひそかにコンサーベイショニストを名乗っています。フリーランス・ナチュラリストを名乗っていたのですが、ナチュラリストは自然に対する倫理性が極めて低い。あの人達が帰ったあと、自然はたいてい荒廃します。4WDのRVなど最高の近代的メカを最大の「大莫迦モン」が乗り回している感じです。私はナチュラリストの模範になろうと志したのですが、

とてもそのような柄でないので、ナチュラルリストの「実験動物」としていろいろなことを試みてきました。最近ではむしろ明確に自然保護を指向するコンサーベーションリストを自称したいと思っています。日本では最初だと思いますので、ここにそのプライオリティを明らかにしておきましょう。

1972年にストックホルムで行われた第一回の国連人間環境会議は、先進国がセットしたのに発展途上国やモスト・ブア・ネイションズといわれる国々が、「お前らは我々を植民地支配してその資源を収奪し、栄華の極みを尽くし、それが陰りをみせたからといってどうこうするのは不屈き千万である」と紛糾しましたが、期せずして、「環境教育だけは振興しよう」ということになって〔注1〕、この会議の行動計画という形になりました。それを受けて1975年に環境教育に関する「ベオグラード憲章」ができ、さらにアジア地域会議がバンコックで開かれ、それからトビリシでの各国政府の専門家会議が開かれました。日本の文部省は、これらの会議のすべてに専門官を派遣していたのです。しかしその専門官が帰国しても、日本にはその受皿が全然なかったのです。だからどうしようもないという状態でした。

〔注1〕

このときに文部省から派遣されていた中山和彦（現筑波大教授）氏から、この会議では、「環境教育など詭弁逃避である」と途上国の激しい突き上げがあったが、会議が作った行動指針の中に強引に盛り込んだのが環境教育であった、という御指摘がありました。

その後環境庁でも、1986年に、官房長官室付で「環境教育懇談会」を設け、何回かの討議の結果、環境教育振興に関する答申を出しました。この会議には縁あって私も参画しました。あるとき文部省の奥井さんという理科の専門官を呼んで勉強会をしました。そのとき私は、「文部省では、ゴミの処理をどのように教えていますか」と質問しました。さすがに奥井さん、即座に、「ゴミは所定の場所に捨てるように教えています」と応えました。

私は、「それでは駄目。捨てたゴミがどうなるかへのおもんばかりがない。また、ゴミをかたづけけるなどは卑しい仕事とする差別の思想が垣間見られる」といいました。奥井さんはいささか鼻白んで、「では、どうしたら良いか？」と言われました。私は、「持ち帰って、分別し、リサイクルに廻すのが良い」と答えました。学校教育の現場では、ゴミに対する姿勢はまだその程度です。1993年、筑波大学で環境教育の学会があったとき、私は大学の環境教育のカリキュラムの分科会に顔をだしました。そのときこんな発言をしました。「ある国立大学では、キャンパスがゴミだらけで実に汚い（実はどこの大学も同じように汚い）。国立大学は我々の税金で運営するのだから、学生にゴミを捨わせるべきだ。日本の青年は徴兵の義務がない。せめてゴミくらい拾ったらどうだ」と。この話をある助教授が教授会の話に、「外部講師の指摘だけど、もっともであると思う」と出したらドイツ語の老教授が、「キミい！国立大学の学生がゴミを捨てるなんて、もっての外だ」と言った。そこで、その助教授は、「でも、これはアーベツェーより大事だと思いますよ！」といったら、その老教授が激怒したといえます。その話を私がして、「大学のゴミはどうなっているのですか？」といったら、ある先生が、「そんなことは瑣末の問題だ。そんなことをいうのはエコ・ナショナリズムだ！」と決めつけられてしまったのです。

たしかにストイシズムを強いるのは問題があるかも知れません。それでは、それが瑣末の問題で、ここでいう環境教育というのが、もっと高邁なものであるのなら、いったい大学のゴミはどうなるのでしょうか。私が年に一回環境を論じる講義を持つ、あるミッションスクールはキャンパスがとても綺麗でした。さすがキリスト教の精神で・・・と思ってみたら、あにはからん。この大学では、高齢者を雇ってゴミを片付けさせていたのです。

こんなところに日本の環境教育の理念（空理空論）と実際との間に、ものすごい乖離があります。文部省が国際会議に毎回、専門官を派遣しながら、戻っても受皿がない。受皿がなければ、環境教育

の展開のしようが無いではないか。

UNEPに「コネクト」という環境教育の機関誌がありますが、日本の報告は何も挙がっていない。報告がなければ、何もしていないと目されても仕方がない。でも、結構いろんなことをやっているのですよね。

しかし、今は時代が変わって、環境サミットも行われ、環境倫理もいわれるようになって、学校教育の場でも環境教育を振興しようということになってきました。そうなると、前にやりましたねえ、70年代に公害はなやかなりし頃に、公害読本とか自然保護読本という副読本ができて、「公害は抑えなければいけない。自然は護らなければいけない」として、子供たちに配布されました。ところがこれらの多くは、「読んでおきなさい」とどまりました。

環境教育についても、その必要について声がかかると、環境教育の指導指針のようなものを各自治体（教育委員会）で作りました。文部省でも小・中・高校の指導指針を作りました。これも読み捨て、もっとひどいものではツンドクです。学校の先生のほとんどは、各教科の単元の消化に忙しくて、環境教育どころではないのです。

私は、環境教育に比較的縁に近いのではないかと、理科教育に関心を持っています。数年前に、カリキュラムが改定されました。そうしたら、どういわけか小中学校とも天文の教材が多いのです。それから解剖顕微鏡が多い。これはラボラトリー・サイエンスではないか。外から採ってきた自然物を、千切って覗いてみる。もっと大きな油浸の顕微鏡で見る。電子顕微鏡でみる。そして遺伝子の座乗がどうのこうのと・・・これはこれでひとつの生命系の理解にはなるかもしれないが、一個の生命が、個体以上のレベルで、自然の中で、お互いに複雑な生命の絡み合いを持って生活している、という視点が全然ない。

だから以前、沼田先生が、「朝顔の鉢植えを、日向に置いたり、日陰に置いたりして、それで生態の勉強をするなど、とんでもない誤りである」と喝破なさいましたが、いまでもその辺の段階を脱却していません。毎日給食で御飯を食べながら、

イネの栽培をポット栽培でしかやっていない。

どうして天文の教材が増えたかわからないが、これはこれで扱えようひとつだと思ふ。

天体を見て壮大な宇宙観を養うのはいい。一番危険なのは天球儀です。ハンドルを廻すと、太陽と地球と月の模型がぐるぐる廻って、日食や月食がおこる。こどもは、あの比例配分で太陽や地球や月の位置関係を考えてしまうのです。

ケプラーの法則を、子供たちに認識させるならば、サッカーボールを太陽と見立てると地球は仁丹（直径で1/109）、月はケシ粒くらいでしかない。しかも、サッカーボールから9mは離れます。この伝でいくと木星や土星はピンポン玉くらい。冥王星などは2000m先の位置関係になります。ここから東京駅くらいになります。トランシーバーを持って連絡しながら学習すれば、太陽系宇宙が如何に広大かが、感覚的にも判るでしょう。天球儀で勉強して誤解するから、惑星直列で富士山が爆発するなど大真面目に考えたりするのです。そのような理科学習で環境問題をクリアーできるのかしら？

それに今度の理科学習のカリキュラムでは、「問題解決の能力」を重視しています。極言すると体制や当局にいわれて問題は解決したが、「原爆ができてしまった」というような結果になりかねない。「問題発見の能力」の方が、環境教育には大事ではないかと思うのです。民間の環境学習や自然観察学習でも、解説型で終わってしまうのが多い。あるいは最近ブームの気味があるのに自然ゲームがあります。「コウモリとガ」などという遊びは体育館でも地下室でもできる遊びです。自然の中でやる必然に乏しい。自然を楽しむのが、都会生活のウサ晴らしであってはいけません。

総じてSo What?～それが何なの？ だからどうなの？という問いただしが欠けています。

そういうことのために優れた指導者が必要だと思うし、私どもも日本自然保護協会で、自然観察指導員の養成を行って、すでに17年。全国に12800名を擁しています。だけど、So What?の出ないような指導者では仕方ないと思うのですが、現実にはそれが多いのです。

その解決のために優れたコーディネーターが欲しいのです。これはただコーディネートするだけでなくアドバイザーとして、解説だけで、あるいはお楽しみだけで終わっている活動を環境教育の方に集約させることのできる人材が欲しいと思います。

もうひとつは、形而下のハードやソフトだけではどうしても律し切れない要素があるので、形而上の世界での心構えのような問題が、とても大事だと思います。これも教育のジャンルに深くかかわってくるのですが、そこで問われるのは「環境倫理」ではないでしょうか。環境倫理はやはり白人の先生方が言い出したのですが、面白いのは、「一神教はいかん！人間優位を説き過ぎた。神父も牧師も倫理構築をしなさい」といっている。

一神教はキリスト教だけではないのに、神父、牧師と名指しているのはやはりキリスト教文化の姿勢をいっているようです。しかも、「環境倫理に馴染み易いのはヒンズー教と仏教である。これは自然や野生との共生について、高い整合性を持っている」といっています。そういわれれば、これは私たちが本家本元であるはずなのに、今の日本の基本的な姿勢は何もかも「経済価値」で律するというエコノミック・アニマルに墮落しきった姿勢です。

リサイクルが大切というが、今、「毎度お騒がせ」が来なくなったのは、海外から安い古紙を「輸入」しているからです。外国から持ってきたのではリサイクルになりません。

その方が「安価」だから、という、今まで古紙集めてたのが、「金にならないからやめた」といって集めない。何のためにリサイクルをやっていたのか？ この辺、形而上の世界でものを考えなければならぬ課題が非常に大きいと思います。

あと4分ありますので、理屈ばかり言ってお前は何をしているか?! といわれましようから、私どもがやっている活動の一端をスライドでお目にかけましょう。

1. 子供が大きな袋を持ち、軍手をはめてゴミを拾っている。

私どもは、野外活動のときにゴミを拾います。でも、こんなやり方は、プリミチーフでありあまり良くありませんね。マン・ウォッチングとして、ゴミを捨てるひとを観察します。

面白いですよ。五つの人間像に分類できます。

- ①ところかまわず捨てるひと……………煙草吸いはほとんどこれ。ネコより劣る。
- ②見えない所に捨てるひと……………性の悪い人。一見インテリ風に多い。(笑)
- ③所定の場所に捨てるひと……………学校がそう。あとのことは考えない。
- ④持ち帰り分別してリサイクルへ……………まずはベスト。
- ⑤ゴミを全く出さないひと……………物凄く無精か神様みたいな人。普通の人格でない。(笑)さて、あなたはどれに該当しますか？

## 2. 海岸の、実験的ゴミ拾い

100袋用意して95袋拾った。これを駐車場にぶちまけて、子供たちが分別し、多い順にならべて、度数分布曲線を描いた。全体の80%を占めるゴミをみたら、スチロホーム、ポリ瓶、プラスチック、空き缶、空き瓶の順だった。子供たちもとても興味を寄せました。

## 3. 80%拾うと、このように綺麗にみえる。

隣の海岸のゴミを、上記の5種類を優先して拾ったら、かくのごとく綺麗に見えた。

この手法から、ゴミの種類で、拾う道具が開発できよう。前ごみで汗を流し、臭くて汚くてという拾い方では長続きしません。

これはゴミ拾いを活性化し、環境教育に結びつけることができます。子供の夏休みの自由研究に恰好なテーマ。しかも、夏休み最後の日にやっても、充分良いお点が貰えること確実です。始業式から帰ってからやっても間に合いますよ。(笑)

## 4. ゴミの処理跡に建てた標示。

「子供たちが一生懸命ひろった。この善意を無視するひとは、崇りがあるように呪いますぞ！怒りのリーダーより」と書いてあります。(笑)ドライバーの捨てるゴミは多いのですが、崇りがあるぞ！は案外気にするので効果的？です。これが書いたのです。(笑)

5月30日の「ゴミゼロの日」に、この「ゴミ学的人間像」のポスターを、当てつけがましくバスターミナルに貼ります。こういう環境教育活動は面白いですよ！

まだ衝撃的スライド「雀蜂を指にとまらせて記念写真を撮る」などがありますが、これはまたの機会に御披露しましょう。

時間きっかりです。これで終わらせて頂きます。ありがとうございました。

## ◇要旨

### 環境教育をヒトの原点で考える

山田卓三（兵庫教育大学）

#### 1. 環境教育の原点

植物でも動物でも生物はすべて個体の生存とその個体の子孫を残すために活動し、生活している利己的な存在である。この利己的な行動は「共存や共生」とか「環境にやさしい」と言ったこととは本質的に反するものである。人間が個体の生存維持のために食べる食物は植物か動物であり、それらはすべて生命のあるものである。したがって人間の生存は食物となる生物の犠牲の上に成り立っている。また、個体の生活のための排出物は多くの場合汚染、汚濁の原因となっている。

人間以外の動物は何千万年と言ったタイムスケールをもって自分の体を環境に適応させて進化して来た。これに対して人間は文化、文明によって環境を変える方向に進んで来た。もっとも人間が生態系から大きくはみだしたのは人類の起源という視点でみるとごく近年のことである。生態系の一員として位置づけられる生活をしていた時代には環境問題は生じなかった。人間が生態系から大きくはみ出し、環境を変える方向に進んで来たことにより環境教育の必要が生じてきた。

#### 2. 環境教育における環境の主体

環境教育の主体が人間であることは誰も異論のないところである。ところがこの人間を個人とするか人類にするかによって考え方が違って来る。

自然の生態系の一員としての生物はそれが個体であっても個体群であっても大きな違いはない。ところが人間の場合は特定の個人が環境の主体となると、環境に対する見方考え方の違いがみられる。極端に言うならば独裁者一人の考え方が国の環境を左右してしまうこともありうる。独裁者でなくても国の行政の視点と一般市民の視点とは異なる場合も当然生じてくる。

今、環境を森に置き替えて、森と人間との関係で考えてみるとこれがよくわかる。

森をめぐる人には三つの立場がある。第一は森の木を育て、それを伐採して生活している樵（林業者）の立場、そしてその森にすむ動物を捕らえて生活している狩人（狩猟者）、さらに第三者として、その森を憩いの場としている市民の立場がある。木を育てる樵にとっては木の芽を食べるシカのような動物は有害であるが狩人にとってはシカやウサギなどは生活の糧である。一方第三者の森を憩いの場としている市民にとっては木を伐ってもらいたくないしシカやウサギや小鳥などは望ましいがマムシやクモなどはいてもらいたくないということになる。このように環境（森）に対する考え方や対応が立場によって違って来る。数の上からは市民が大多数なので市民を主体とした環境づくりを考えがちであるが森を育てている人が、実は木を伐る樵であることを忘れて森の保護保全だけを叫んでいるだけでは環境問題の解決にはならない。お互いの立場が理解できるような教育が必要である。

#### 3. 動物の行動の原点

動物の行動は個体の維持生存のためとその個体の子孫を残すための生殖行動に要約できる。人間以外の動物は生得的に生きるための能力を持っている。ところが人間は社会的文化的な生活をするため学習しなければならない部分が85%もあるとされている。したがって、生得的な行動は15%ということになり育つ環境の影響がいかに大きいかかわかる。

動物の行動は餌と配偶者さがしと、それに子育てにつきる。人間も基本的には同じであるが家族

があり、地域社会があり、さらに国家と言うように他とのかかわりが複雑になっている。家族を考えた場合、夫と妻とは非遺伝子関係にある。生物の行動が自分の遺伝子を子孫に残すためだという考えを人間に当てはめると妻は自分の子を生み一人前に育てるために夫が必要であり、子育てが終ると、不要な存在となる。粗大ごみと言う言葉はこのことをよく表している。

環境にやさしいとか自然との共存と言った抽象的なことを考える以前に、最も近い人間関係である夫と妻との関係に置きかえてみるとよい。おもしろいと言うものはお互いの立場が理解できることが基盤である。夫と妻は男性と女性であり、動物的には雄と雌である。

生物の長い雌雄の分化とその行動をみると、それぞれの特性を生かしていることがわかる。男でも子育てができる人間の場合はそれぞれどちらを分担してもよいがお互いの立場を認め、特性を生かしてこそそれがやさしさとか共存の道であると思われる。

#### 4. 人間の特異性

動物の本性が利己的行動であるとするならこれは環境教育の目指すものとは相容れないものである。環境教育の原点は、利己的な本性的な行動を抑制し、他への思いやりの態度の育成にある。人間の脳は他の動物に比べると極めて発達している。特に新皮質が発達し、古い皮質は脳の辺縁系といわれるように底部に押しやられたり、大脳半球の中に押し込まれている。この古い皮質には個体の維持と種族の維持、すなわち食と性をつかさどる中枢があり、新皮質系には知覚、理解、認識などといった精神活動にかかわる中枢がある。そしてこの新皮質は古い皮質の活動を抑制する働きも持っている。動物は主に古い皮質で活動しているので種集団内の個体間にそれ程大きな差はみられない。ところが人間は新皮質の働きが大きいので、社会的文化的な影響を受け、個人差を生じ個人によってその行動は多様となっている。

動物には物欲とか名誉欲はないので人間のような蓄財とか、戦争といった闘争はない。動物の闘

争はその個体と遺伝子の維持のためであり、空腹が満たされたり、配偶関係が成立すれば治まるものである。動物の闘争は点であり、線や面のように持続拡大することはない。

人間は旧皮質の欲求を新皮質で抑制することができる。これが理性であり、環境教育はどちらかというとして理性に基づいたものであるが、理性や知性だけでは行動を伴わないので感性の育成が平行して必要となる。

#### 5. 個と類の意識差

個は個人であり類は人類であるがこの間にはさまざまなレベルの集団がある。それは家族、親族、学校、地域、市町村、都道府県、国、共和国、共同体などである。

オゾン層の破壊とか酸性雨（霧）といった環境問題は地球レベルの問題であるとし、個人の問題としては意識しにくいものである。このように環境意識は利己的なものである。個人の生活を豊かにしようと思えばそれだけ消費するエネルギーは増大し、それだけ環境は悪化することになる。これは知性でわかっているとしても生活の程度を下げることは困難である。

また、人間は自分が豊かなときは他人を思いやる気持が生ずるが自分の生存が危ぶまれるような状況ではそれができなくなる。

環境教育はこれら原点を考慮した上で行う必要がある。

#### ◇要旨

都市におけるフィールドワークのころみ

小川 潔 (東京学芸大学)

Some attempts with field-works on environmental studies in urban area.

Kiyoshi OGAWA

Tokyo Gakugei University

東京・谷根千地区のフィールドワーク

本講演では、市民の主體的活動という意味で、「環境教育」ではなく「環境学習」という用語を

用い、講演者を含む市民グループの実践活動を紹介することにした。

東京都の台東区と文京区の境に位置する上野公園から谷中、根津、千駄木あたりは、震災・戦災を免れた地区があり、江戸時代から現代に至る建物やまち並みが点在し、手作りの職人芸や庶民文化が残るため、東京の新しい下町として生活空間が注目を集め、日曜日ともなれば駅から散策の列が続く光景も見られる。

ここでの住民活動としての環境学習は、1) 長屋と路地、墓地などに代表されるまち並みと文化遺産の普及と継承<sup>1)</sup>、まち並みに合わせた住宅のあり方の研究<sup>2)</sup>、2) 井戸を中心とする地下水の調査<sup>3)</sup>、3) 大気汚染や夏の熱環境に関する路地、緑地と幹線道路の比較調査<sup>4)5)</sup>、4) 上野公園や旧水系を中心とした自然観察<sup>5)6)7)8)9)</sup>などとして継続されている。また、住民の歴史・生活文化の掘り起こしと記録・普及には、住民による地域雑誌「谷中・根津・千駄木(通称谷根千)」の果たす役割が大きい<sup>9)</sup>。

まち歩きと調査に代表されるここでのフィールドワークを路地調査に例をとると、夏の熱環境調査では、幹線道路の暑さ(37℃くらい)と路地・緑地との気温差を実測し、緑地や路地は涼しいという生活感覚を実証している。検定した棒状温度計を牛乳紙パックの簡易百葉箱に入れ、うちわで風を送って気温を正確に計る方法は、人手さえあれば比較的安価で詳細な環境測定が可能なことを教えている。この調査には、環境保護団体のメンバーや地域住民の参加があり、子どもたちも「夏休みの自由研究」として参加し結果を利用している。また大気汚染調査にはNOxのカプセル簡易測定法を用いている<sup>10)</sup>が、全都いっせいで調査の折に測定カプセルを自作し、測定後の比色定量も自前で行ない、自動測定局と比較してデータの補正をし、しかも参加者宅のほかに500mメッシュの交点(定点)を毎回測定地点として加えている。また、路地の環境特性を把握するため、幹線道路から路地の内部に向かって10m程度おきに調査し、汚染物質濃度の逡減を明らかにしている。住民にとっても、自分たちが住んでいる生活環境の実態は

おおいに関心があるところである。

路地というと、行政からは車が入らない前近代的な道と白い目で見られがちだが、住民たちにとっては、夏涼しい、大気汚染が少ない、車が入らないので安心して子どもを遊ばせておける、近所が近く会話出来るなどメリットも多く、そのよさがみつかればまちへの愛着も増すと考えられ、路地調査は都市住民が自分たちのまちのアイデンティティを持つ契機となることが期待される。また、住民感覚からのきめ細かい生活環境の調査として、大気保全の専門家からも注目され始めている。これまで環境基準は、病気になるような汚染状態を基準に議論されてきた(実はそれすらないがしろにされたのが実態だが)が、路地調査の結果は、住民の生活上の安定感、すなわちまちのアメニティレベルでの環境基準を探す試みでもある。環境科学とは、このような住民の環境感受性から生まれる価値観に裏打ちされて独自の科学として自立するのであろう。その意味で、環境科学と環境教育は表裏の関係にあると言ってよいだろう。

また、井戸調査によって地下水や水環境を身近なものとする試みも行なっている。井戸水の多くは人の大腸菌は検出されないし、あっても沸かせば問題はない。しかし東京都心では、井戸という保健所から嫌われ水道への転換が勧められていて、人々の地下水や水へのかかわりはどんどん薄れる一方である。谷根千地域では旧藍染川があった河道近くでは、井戸をあけると足元40~50cmに地下水が見える。地表はすっかりコンクリートで隠されているが、地下には自然が脈々と生きていることがわかる。また、私自身あきらめていた湧水が近くにあることを知ったときは、自分の住む地域に誇りすら感じた。井戸調査がきっかけで、こわれた井戸を修繕して檀家から喜ばれているお寺もあるし、名水ということで汲みに来るひとが絶えない井戸もある。2年前、水郷水都全国会議のワークショップツアーで全国からの参加者を案内して、冷やした井戸水をふるまった折、地方からの参加者から「この水は農薬が入っていないので飲めるのがうらやましい」と言われて、地方は水がよく、都会は水が悪いという自分たちの環



境観がひっくり返された記憶がある。

### 都市の環境学習の基本的考え方

日本の都市には今や人口の大多数が生活するといわれ、特にそこで生まれ成長する子ども達にとっては、都市こそがふるさとという基本的な環境観（原風景）を形成する場である。都市においても環境学習の主体（環境教育の対象）となる者は、第一義的にはその住民である。都市では特に、住民の社会的無関心やコミュニティの崩壊がいわれている。これからのコミュニティの再生は自覚した個人の自主的参加と連帯意識が不可欠となる。そのためには、まちを歩く、地域を見直す、古くからの住人の生活の知恵やまちの過去の話の聞くといった環境学習が有効である。新住民といえども、そこに住み続ける、あるいは子育てをしていくなれば、自然や建物、時代の記念物、過去の自然を伝える地形や遺構、さらにはそこでの人々の暮らしや現在に残る行事、遊び、人間関係等、みずからのまちの特性（アイデンティティ）を自覚し、新しいふるさとづくりに積極的に参加していくことが重要である。また、都市には社会化された自然がよりはっきりした形で存在する。自然が存在している地域を人間社会や歴史文化も含めて総体として対象とする必要がある。

こうした視点から地域を見直す行動を、ここではフィールドワークという概念でとらえてみた。人々が生活する都市の現場で、さまざまな調査・取材を通してじかに環境や人々の生きざまに触れ、感じ、考えることができる<sup>11)</sup>。まして自分の住んでいる地域であれば、他人事ではなく、問題があれば直接身にふりかかるし、その解決も自分が責任を負うことになる。

環境教育では実物による教育、体験による教育、現場での教育ということが重視される。これらの背景には、情報化・都市化社会が忘れかけている実体験の持つ意味を問い直そうとする立場がある<sup>12)</sup>。ひとつには言葉を代表とする情報と実物との乖離、ひとつには都市という閉鎖系的な概念と自然のシステムとの乖離への危機意識と言えるだろう。

地域のフィールドワークでは、いやおうなく地域全体が視野に入ってくる。理科の一単位ではすまないし、自分とは無関係のケーススタディではない。問題解決には、たとえば温度とか大気汚染濃度とかの個々のファクターで済むことはなく、地域のトータルシステムをどう動かすかを考えねばならない。そのために知識の総動員が必要である。地域のフィールドワークはそういう意味での総合性を持っている<sup>13)14)15)</sup>。

（本稿は講演内容に即して講演要旨を加筆添削したもので、基本的には以下の文献に負っている。あわせて参照していただきたい。）

### 文献

- 1) 小川 潔 (1992) 環境教育の視点からの都市論。環境教育事典（本谷勲・小原秀雄・宮本憲一ほか編、労働旬報社）630-635。
- 2) 小川 潔 (1992) 環境教育の20年。環境情報科学21(2)、2-6。
- 3) 小川 潔 (1992) 環境教育の展開と現状。環境教育概論（北野日出男・木俣美樹男編、培風館）1-24。
- 4) 小川 潔 (1992) 野外で気温をはかろう。前掲・環境教育事典537-538。
- 5) 小川 潔・木内知美・森まゆみほか編 (1995) 上野のお山を読むー上野の社事典。p120。谷根千工房。
- 6) 小川 潔 (1992) 地域史の調査。前掲・環境教育事典548-550。
- 7) 小川 潔・斉藤淳子 (1993) 上野公園のイメージと歴史的特性とのギャップ。人間と環境19(2)、58-67。
- 8) 小川 潔 (1995) 上野公園の好まれる空間と環境要素評価。人間と環境21、135-142。
- 9) 小川 潔 (1994) 都市の中で環境学習を考える。都市問題85(5)、3-13。
- 10) 藤田敏夫 (1992) 二酸化窒素の測定法。前掲・環境教育事典542-543。
- 11) 山岡寛人 (1986) 武蔵野台地の人々の暮らしと自然。教育内容研究5、3-44。
- 12) 小川 潔 (1992) 野外観察会のあゆみと方向

性。前掲・環境教育事典604-610。

13) 山岡寛人(1992)地域の調査。前掲・環境教育事典546-547。

14) 山岡寛人(1992)都市のなかで環境教育を考える。前掲・環境教育事典625-629。

15) 山岡寛人(1993)フィールドワークを通して総合化をさぐる。授業の臨床研究による教職の知識基礎の開発研究(稲垣忠彦編)37-54。

## ◇要旨

### 環境変化の新段階と「持続可能な社会」

#### —統合的環境教育の重要性—

和田 武(愛知大学)

概要：今日の環境変化は地球自然システムの急激な攪乱という新たな発展段階に達しつつあり、「持続可能な社会」の構築は不可避の課題である。それを可能にするために、自然・社会・人間の相互関係を扱う統合的環境教育を発展、普及させることが重要になっている。

キーワード：環境変化の新段階、持続可能な社会、統合的環境教育

#### 1. はじめに

最近、旭硝子財団が環境問題に関わっている人人を対象に実施した「第4回地球環境問題と人類の存続に関するアンケート」(1995.10)の結果によれば、今日の地球環境に対する危機意識は日本が最下位という結果が出ている。また、地球サミット以後の環境教育の進展度評価でも、「進展した」と「ある程度進展した」の回答合計が日本は49%に過ぎず、唯一過半数に達していない。このような日本の遅れた状況を克服するためにも環境教育を質量共に発展させる必要がある。

環境教育の主要な目的は、環境問題に関心を持ち、環境破壊を防止するために行動する多くの人人を生み出すことによって、環境危機を克服することにある。人為的環境変化が新たな段階に入っている現状を踏まえれば、既存の科目の中で環境を扱うだけでなく、今日の環境問題の本質と特徴、「持続可能な社会」への展望を主題として広い視

野から総合的・統合的に論じる環境教育の必要性が高まっている。すでに多くの国では、各レベルの学校教育において、従来の個別教科の中だけでなく総合的・統合的環境科目を実施している。しかし、日本の学校教育では大学以外はまだ既存教科の中で部分的に環境教育が行われているだけであり、見直しが必要な時期にきている。

#### 2. 人為的環境変化の新たな発展段階とその特徴

かつて、環境破壊や公害は地域的に限定されていたが、1960年代頃から国境を越えた環境問題が見られるようになり、1980年代から地球規模の環境破壊が顕在化してきた。いまや人為的環境変化が地球規模の自然システムの攪乱(物質、エネルギー、生物系の準定常状態の急激な破壊)を伴う新しい段階に到達していることは、オゾン層破壊、温暖化、酸性化、海洋汚染、それらに伴って生じる生物系の変化などが顕在化しはじめていることから明白であろう。それは人類の生存基盤を根底から破壊するこれまでになかった変化であり、その解決なくして人類の未来はありえない。

新たな段階に入った環境破壊の特徴は、現象面では、地球規模の広域性、種々の環境問題間の相互連関性、原因発生から結果発現や影響発生までにかかりの期間を要する晩発進行性、破壊の回復が困難な不可逆性などであり、影響面では、あらゆる人々と生物に世代を越えて長期的に影響するような空間的、時間的広がり大きいことである。さらに、原因面では、地球の有限性を無視した大量生産・大量消費・大量廃棄を基本とする人間活動が原因であり、生産体系、科学技術、生活、文化や価値観のあり方などを含む現代社会全体のあり方が問われている。

#### 3. 「持続可能な社会」構築の重要性

これらの特徴を踏まえれば、環境破壊防止には、大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会の転換、人間活動がもたらす環境破壊の科学的予測に基づいて事前に原因を排除する予防的対応と個別対応のみに陥らない総合的・統合的な対応を可能にする「持続可能な社会」への変革が不可欠である。

人類の持続可能性を求める潮流は、1992年のUNCED以来、国際的に環境保全のための取り組みの主流になっている。

人間の活動が大規模化すれば、そのシステムが自然システムと矛盾する社会は存続できない。自然界の物質、エネルギー、生物の準定常状態を維持でき、現代だけでなく未来世代も健全な生活を送り続けられる「持続可能な社会」の構築が現代の緊急かつ最重要課題である。「持続可能な社会」の基礎となる自然と人間の健全な関係の構築は、人間同士の健全な関係の構築と密接に関連する。環境破壊や資源浪費などの人間社会と自然の矛盾と、貧富格差、人権抑圧、軍備拡大などの社会内の諸矛盾は、利潤最優先の価値観と経済システムやそれを支える非民主的政治システムがこれらの矛盾の共通原因であるからである。

#### 4. 総合的・統合的環境教育の重要性

こうして、いま環境教育においては、環境破壊の現状、本質、特徴の理解を基礎に、「持続可能な社会」の構築を展望することがきわめて重要になっている。したがって、環境教育では持続可能性の追求を柱にした自然・社会・人間の相互関係の総合的・統合的把握、つまり自然、社会、人文科学のあらゆる分野からの環境問題への総合的・統合的アプローチが不可欠となる。それは本質的に環境保全だけでなく豊かな人間性を育む教育でもある。今後、大学教育を中心にあらゆる教育の場でこのような総合的・統合的環境教育の発展と普及がはかられねばならない。最近、大学では総合科目や総合コースなどの総合的環境教育が急速に増加しつつあるが、今後、すべての大学で環境関連の総合的教育科目を設置すると共に、その内容を複数の個別分野の単なる寄せ集めでない統合的なものへ発展させることが重要である。さらに、高等学校や中学校教育においても総合的・統合的環境教育の場を設ける必要があろう。既存の個別教科の中でバラバラに環境を扱う限り、現在の環境問題の本質とその解決の方向を考える教育としては不十分である。環境教育における学際的、総合的、統合的方法の重要性については、Unesco-

UNEPの「1990年代の国際環境教育・研修行動計画」(1987年)やUNCEDで採択された「アジェンダ21」をはじめ、国際的には広く認識されている。

また、このような統合的環境教育の発展は、教育と科学全体に「環境」を基軸にした再編の契機をもたらすであろう。

#### 筆者の関連著作

##### \* 著書；

『地球環境論—人間と自然との新しい関係』（創元社、1990）、

『地球環境問題入門』（実教出版、1994）、

『環境問題を哲学する』（共著、文理閣、1995）

の第1章「新たな段階に入った環境破壊」、

『地球環境の有限性と人間社会の変革』（共著、日本科学者会議・公害環境問題研究委員会、1994）

の第4章「永続可能な社会実現の戦略—科学技術と環境教育—」

##### \* 論文；

「一般教育としての環境教育の今日的意義と実践」

（『一般教育学会誌』、第15巻、第2号、1993）、

「地球環境変化の新段階と『持続可能な社会』への変革」（『思想と現代』、白石書店、第37号、1994）、

「環境変化の新段階と環境教育」（『第1回サステイナブル・ソサエティ全国研究交流会記念論文集』、同研究集会実行委員会、1994）

「総合科目『地球環境・科学技術・人間社会—持続可能な人間のあり方を考える—』の実践と受講生の反応」（『一般教育論集』、愛知大学教養部、第8号、1995）

「大学における環境教育の現状と課題」（『大学等廃棄物処理施設協議会会報』、第11号、1995）

「地球環境問題を主題とする統合的環境教育の試み—講義『自然科学概論—地球環境問題の基礎科学を学ぶ—』の実践と受講生の反応」（『一般教育論集』愛知大学教養部、第9号、1995）

## ◇要旨

### 環境教育・研究における情報利用のための援助

中山和彦（筑波大学学術情報処理センター）

#### Support for Information Use in Environmental Education and E.E. Study

NAKAYAMA, Kazuhiko (University of Tsukuba)

概要：環境教育の実践や研究をするためには、参考となる情報を必要とする。しかし、必要とする情報や資料を簡単に入手することは日本では困難である。環境教育の実践・研究のために必要な情報や資料を容易に入手できるようにするためには、どのような仕組みを必要とするか、具体的な検討を行う。

日本では、国外の環境教育についての情報があまり入っていない。そのため環境問題について南北対決が明確になったストックホルム会議において、環境教育だけは全世界の共通理解のもとに発足したと考えられている。また、ベオグラード・ワークショップはトビリシ会議の準備のための集まりであったのに関わらず、そこでまとめられたベオグラード憲章が誤訳のまま、日本では世界の環境教育の根幹であるとして引用されている状況である。そのような状態を改め、日本における環境教育の実践・研究を振興するためには、国内・国外で、どのような研究、プロジェクト、実践が行われているかを知り、参考にすることが必要である。また、必要な資料を提供してもらったり、適切な助言を受けることも重要である。しかし日本では、環境教育・環境教育研究に関する情報を入手したり、助言をうけられるような環境が整っていない。今後の日本における環境教育の発展のためには、環境教育情報センターを設置して、情報や資料の作成、収集、配付を行ない、助言がうけられるような仕組みを作らなければならない。

環境教育情報センターの仕事の第一は、環境教育関連情報や資料の情報化である。学校、教師、地域グループ等が、環境教育についていろいろな試みをし、成果をあげている。しかし、それが情報化されていない限り、他の人に伝わることなく消えていってしまう。そのような例が非常に多い。

そのために、まず「他の人にも意味が伝わるように、誰にでも認識できる文章、図、表、言葉、画像などの形態で明確に示す」ことが必要である。

一方、せっかく情報化しても、公開をしなければ、公開できなければ、また、公開しても皆に知ってもらう場がなければ、何の意味もない。そのため、公開された情報が広い範囲に伝わるように、次のような内容の実施を目的とした、情報伝達のための仕組みを作ることが必要になる。

- ①情報化、公開することの援助と促進。
- ②公開された情報の収集と保存・蓄積。
- ③外国語の資料の日本語化。
- ④収集、日本語化した資料の目録作り。
- ⑤作成された目録の印刷、配付。
- ⑥目録のデータベース化とオンラインサービス。
- ⑦利用者へのサービス（閲覧、コピーの作成、配付）。

アメリカで熱心に環境教育に取り組んでいる州の1つウィスコンシン州は、教員採用条件に環境教育の必修を求めている。同州は、環境教育を小中学校の必修教科としている。学校の教員や子どもに助言をしたり、指導をすることのできるボランティアや専門家のリストを作成して、学校に配付している。このような環境教育の指導者、助言者、情報を提供できる人を結集して人のネットワークを形成することも、また、重要である。

## ■参考資料

- 中山和彦他「ERIC入門」丸善 1983
- 中山和彦「基礎的環境教育情報のあり方—アメリカにおけるERICの活動を中心にして—」平成2年度環境庁委託事業（財）環境情報普及センター 1991
- 中山和彦「環境教育に必要な情報、助力をどのようにして得たらよいのですか—竹園東小学校の例で—」『小学校環境教育ガイドブック』pp. 273~278 教育出版 1994

## ◇要旨

環境教育における“いのち”と“心”の棲み家  
谷口文章（甲南大学）

## 1. はじめに一現代の若者と環境観一

## (1) 現代の若者の環境世界

現代の若者たちに、気がかりな現象が生じている。それは、「ボーダーライン・パーソナリティ」と称せられているが、その特徴は、不安定な対人関係、自虐的な衝動性、感情の動揺、アイデンティティの混乱、慢性的な空虚感や倦怠感などである。それに加えて、自閉的な私生活主義や摩擦を回避する潔癖症も考えられる。このような傾向をもつ現代の若者たちが環境についてどのように考えているか、とても不安に思うところである。なぜなら、彼らにとっての環境世界とは、即、自分の世界であり、自分を中心とした半径2.5m以外は異次元の世界という「自他分断された環境観」であるからである。

## (2) いのちの稀薄さと心の貧困

若者たちの間で「いのち」が稀薄になっている。例えば、200人のクラスの中で、「自殺をしたいと思ったことのある人？」と手を挙げてもらうと、10年ほど前までは、クラスの内、2、3人だったのが、最近では、20～25人ぐらいが手を挙げる。

「心」というまでもなく、物質的な豊かさに反比例して、貧困の方向へたどるばかりである。相手の立場に立ち得ない、自分のこと以外は関係ない、「一応」という答えだけで積極的な判断はない、ファミコン、ヴァーチャル・リアリティの世界に入り込んだ自閉的な病理現象が目立つ。

なぜ、いのちの稀薄さと心の貧困の時代になったのだろうか。その一つの原因に、彼らが濃淡のない均質・均等な時間・空間に育ってきたことがあると考えられる。

## 2. “いのち”と“心”の棲み家としての濃淡のある時間・空間

## (1) 均質・均等の時間・空間

濃淡のない均質・均等の時間とは、時計で計った物理的時間である。例えば、好きな数学の授業

60分と嫌いな英語の授業60分とではどちらが長いであろうか。時間で計れば両方とも同じ長さである。しかし、個人の時間はちがう。好きな数学の時間は短く、嫌いな英語の時間は長い。このように時間には、「均質・均等の時間」と個人によって相違する時間の二種類があり、現代人はこの「濃淡のある時間」を忘れてるように思われる。

それでは、空間はどうであろうか。ユークリッド幾何学では、どのような三角形の内角でも、その和は180度である。しかし、現実にもそのような均質・均等の平面があるだろうか。具体的に述べると、丸い筒の上に書かれた三角形の内角の和は、180度より大きい。またひょうたんの首のようなへこんだ筒の上に書かれた三角形の内角の和は180度より小さい。現実の世界を構成している空間には、均質・均等ではなく、つねにひずみのある凸凹した濃淡があるのである。

以上のことから、生命やいのちは、抽象的な時間や真空の空間には生きられないことがわかる。そして、いのちの稀薄さと心の貧困の原因は、若者たちが他を排除して清潔になった、そして均質・均等の時間・空間に生きざるを得なかった生活環境の変質によることから生じている、と推測される。

## (2) 濃淡のある「今、ここ」という棲み家

ところで、濃淡のある時間・空間に生きる動物は、本能行動をとるという意味で「今、ここ」に拘束されている。これに対して、人間はこのような本能のみに従って生きるのではなく、理性と感情をもっており、それらを行為の原理として「今、ここ」から自由である。例えば、J.J.ルソーは次のようなことを述べている。広場があるとしよう。これは、均質・均等の空間である。誰かが、その中心に杭を打ったとする。すると、村人たちが集まってその周りで、踊りや祭りがはじまる。人間の「聖なる時間・空間」の創造である。

動物と同じように「今、ここ」に拘束されながらも、人間は、理性と感情によって、聖なる時間・空間を創ることができる。これが、人間の「いのちと心の棲み家」である。

### 3. 生態系における自己組織性

#### (1) 自己組織性の考え方

生態系は、「すべてがつながっている」ないし「入れ子構造」になっている。細胞と組織と器官の三つの関係を例にとってみる。細胞と組織の関係は、細胞は組織からみると「部分」であり、組織は細胞にとって「全体」である。そして組織と器官の関係からみると、組織は器官にとって「部分」であり、器官は組織にとって「全体」である。つまり、組織は「部分」であると同時に「全体」でもある。この現象は“近代科学の言語”で説明しようとするなら、矛盾に陥る。しかしながら、生命の自己組織論は、このような生命体の入れ子構造を前提にし、同時に部分と全体である“組織”は「ゆらぎ」ながら部分である細胞に情報を与え、また全体である器官から情報を受け取り、そして逆の情報交換もおこなう、と考える。このように、生命現象は入れ子状に「自己言及」しながら循環して生命体を維持しているのであるが、さらに生命と環境も、生態系全体も入れ子構造を有する。

このような自己組織性の考え方は、客観と主観、人間と環境、部分と全体などという二項対立を排除した把握の仕方である。その考え方は、二項の両者が表裏一体して、融合し、互いに循環している生きた生態系のあり方をとらえるのに有効であると考えられる。

#### (2) 生態系と自己組織性

自己組織性の論理は、その基礎に自他の融合の発想がある。それを、環境に具体的に引きつけて考えてみよう。森が荒れているのは、人間が森に入り親しむことが少なくなったからである。ある程度の人為と—それはハイ・テクノロジーのレベルではなく—によって、人間と環境が相互作用することで生態系が維持されているのである。人間も自然の生態系を構成する一員なのである。また生態系には、人間が汚染したものは人間にはねかえるという、自己回復のメカニズムがあることはよく知られているところである。

### 4. まとめ—環境教育における“いのち”と“心”の教育—

現代の若者のように、自然の大地の土が汚い不潔と感じ自己完結的に閉じ込んでしまうのではなく、幼いときから自然の中で身体感覚を通じた自他融合した教育が必要であろう。

今日の提案は、第一に、環境教育における「“いのち”と“心”の榎み家」は、濃淡のある「今、ここ」という環境であることの認識の必要性。第二に、人間同士、人間といのち、人間と環境の自他融合している現実の現象を、自己組織化する自然環境において、頭の知識ではなく「身体知」によって学ぶこと。その二点をふまえながら、第三として、環境教育は、「いのちを大切に、心豊かな人間像をめざす」ということ。もし、このような目的をもつ環境教育が実現され、そのような子どもや若者が育てば、環境問題も結果として解決していくと考えられよう。

#### ◇要旨

豊かな人生のために

金森正臣（愛知教育大学）

環境問題は、ヒトの生存を危うくするようなヒトによる環境への影響の問題である。環境問題の解決のために、科学や技術に頼ろうとするが、本当に科学によって解決することができるか考えてみる必要がある。科学の起源や特性から分かるように、科学は部分的には正確であり確かなものであるが全体を捉えるには極めて困難な問題を抱えている。正確で確かな部分を繋ぎ合わせたその結果、全体として様々な不整合が起こってきたと考えることができる。

一方、もう一つの問題は、科学や技術を使って問題を引き起こしたヒトそのものを考えてみる必要がある。科学は知識を生み、知識は技術を生み、技術は物を生産し、生産された物が環境の問題を引き起こしているが、使う人自身が使い方を誤らなかつたら、環境の問題は起こらないであろう。

科学とヒトの関係を見ると、科学の知識はヒトの人生に本当の意味で生かされていることは少ない。科学の知識や技術を否定するものではないが、

謙虚に考えてみる必要があろう。私自身の立場としては、環境が良くなるとか、ヒトの生存が保証されると言った問題は、過去の生物の歴史が示しているように、どうすることもできない問題であり、どちらでも良い問題であると考えている。しかしながら、それぞれのヒトの人生は幸せを求めて努力されており、同じ人生を生きるのであれば、人生を楽しみ、満足の行く人生を歩んで欲しいと思っている。

環境問題を考えてみると、エネルギーの使用量と関係していることが理解される。使用量が多くなるほど、問題は広がり、深刻になる。ヒトは、エネルギー無しには生存できないが、内容的には、生命を維持するエネルギーとそれ以外の直接生命と関係しないエネルギーがある。文明が発達するほどエネルギーを使用する量が増加するが、増加部分は生命維持と関係しない部分である。私は今年、世界の文明と離れたアフリカの中で2ヶ月半を暮らしてきた。原野の中から、村へ出、町を通り、都市に出、日本に帰ってみると、使用エネルギー量が多くなるほど、生きている実感が薄くなるように感じた。また周囲の人々を見ていると、都会に出るほどストレスにさらされている感じを受けた。

アフリカの物のない社会、自分の筋力が直接自分の生命を支えている社会を見ていると、日本のように物が沢山あり、金でなんでもできる社会ほど生命感(生きている身体的感じ)が希薄になり、心の安定が悪くなるように感じられる。特に子ども達について、自分が生きることにエネルギーを使うほど、生き生きしているように見え、環境教育の根本的問題は、この様なところに存在していると思われる。

日本の人々は、必要以上の物を持ち、それでもなお持とうと追われるように努力をしている。これはいったい何であろうか。

文化は、それぞれの自然環境にマッチして発達してきている。乾燥の荒地には放牧の文化が、肥沃な川の領域には農耕が発達した。歩くことを主体とした放牧の文化は、物を持つと歩けなくなり、根底にはあまり物に執着がないことが感じられる。

一方、農耕の文化は、移動せず、収穫期の物を貯めて置いて端境期を生き抜く文化である。そのため、貯めることが生き残るために必要な文化であった。西洋に発達した技術が日本に持ち込まれ、人力を越えて物を生産するようになった結果、貯め込む文化の本随が発揮されていると思われる。

ヒトはどの様な時に物に執着するであろうか。十分な満足を得られているときには、多くのヒトは物を必要としていない。愛する恋人を我が物にしようとするときには、多くの人がすべての物を投げ打っても、恋人一人を得たいと思ひ、得たときには十分な満足をしているであろう。やがてその夢が覚めるとしても。

ヒトは精神的に不安定であると、それを回避するために物を持ちたり、刺激を求めてギャンブルに浸ったり、酒を飲んだりすることが多くなる。取り組みにくい問題を当面回避するためであろう。その間は忘れていことができるが、根本の問題を解決したわけではないから、時間がたつとまた不安がつのってくる。自分の内容が充実していないと、周囲が新しい自動車を買ったりすると、後れをとったような気分になりまだ使える物があっても新しい物を求める。手に入った時は満足しても、この様な満足はやがて消え、次なる物を求めて追われるような気分になり、本当の安心を得ることがない。

これは、自分の内容で問題を見ているのではなく、周囲との相対的な評価によって自分の評価を決めているからこの様な現象が起こる。絶対的な自己の価値によって物事を判断していればこの様な不安は拭い去られ、多くのエネルギーを無駄に消費しなくても良くなる。ちなみに、科学の知識は絶対的な自己の価値の中にはほとんど組み込むことができず、おしゃべりの材料程度の役割しか果たさないように思われる。

仏教における修行は、絶対的な自己の価値に到達する一つの方法であろう。一休禪師・一遍上人・白隠禪師・良寛和尚などは、修行の結果ほとんど物を持たず、自分の生命維持と僅かばかりのエネルギーで暮らし、死後ほとんど何も残っていない人々である。しかし、書き残された物には

豊かな精神世界が見られ、幾百年を経た今日、これらの人々を巡って多くの書物が刊行され続けていることを見ると、多くの人々が心引かれる普遍的な何物かがあることは明らかであろう。

この様なことを考えると、ヒトは心が貧しくなるほど物に頼る傾向があり、現在の環境破壊の原因の一つは、人の心の持ち方、人生の過ごし方の問題と見ることができる。私自身は約10年間の内観によって、自分の内を見つめるように少しずつ変化してきた。そして、なぜイライラするのか、なぜストレスを持つのかは、自分の心の目に見えている世界によって変わることが明らかになってきた。しかし、そのことを頭で理解してもすぐに行動がそのように変化するものでもない。知識で分かって、身体知として体感できないと行動は変化せず、心も安定しない。知識は役に立たず体験しないと人生には使えない。例えば、熱いと火傷をすると言う知識を、正確に沢山持っても火傷を避けるとっさの行動には結びつかない。知識はなくとも1回の熱さの経験は、火傷を避ける行動と結びつくことを考えれば明らかであろう。従って修行の中であることが明らかになっても、実際に身につくのはずっと後のことである。それでもすればするだけの効果はあり、少しずつ心は安定し、日々の生活が楽になり、楽しくなるのは確かである。

物によって人生の満足が得られないことは、終戦直後の物不足社会と、物に溢れながら人生の満足を得られないでいる幸福感の薄い現在の社会の現象を比較して見れば明らかである。環境教育の1つの重要なテーマとして、ヒトがいかに人生を楽しみ、充実して生きて行くかを取り上げる必要があろう。

## ◇問題提起

### ボランティア活動とは

唐木理恵子（練馬ボランティアセンター）

#### 1. ボランティアセンターとは

ボランティア活動を推進する機関として、ボラン

ティアセンターやコーナーなど、あるいはボランティア担当窓口が区市町村の一つは置かれている。練馬ボランティアセンターを運営しているのは、練馬区社会福祉協議会で社会福祉法人格のある民間団体である。よく行政の1部門と思われがちだが、別の機関であり、職員も公務員ではなく、団体職員になる。社会福祉協議会が運営していないボランティアセンターもある。いずれのボランティアセンターもボランティアに関する情報収集、情報提供、研修、相談などを行っている。

最近では、地域ごとにボランティアセンターが置かれてはいるものの寄せられる相談の内容は、環境問題や国際的な問題など地域を超えざるを得ない内容が多くなっている。しかし、地域の、特に福祉的分野から出発したボランティアセンターは、これらの課題にどうしても弱いところがあるので、他の機関、団体との情報交換、連携がどうしても必要になってきている。

#### ・ボランティア活動とは

ボランティア活動というと「ほどこし」「奉仕」のイメージが強かったのだが、ここ数年でこのイメージは一般的にも大きく変わってきている。

ボランティア活動の基本原則と言われているのは、自分自身が決め、自らすすんで活動する「自主性」、社会とつながりを持つ「社会性」、無料ではなく、お金なんて問題ではないと考えて活動する「無償性」、新しいことに取り組む、新しい社会作りを行う「創造性・開拓性」の4つである。

私はボランティア活動の理念とは「命・人権・平和」を守っていくことではないかと考えている。

#### 2. 学校、PTA、児童・生徒から受ける相談の状況

##### ・「活動」か、「体験学習」か

もともと地域の中で主に社会福祉の分野が強いボランティアセンターなので、学校からの相談に関しては、福祉教育の分野が多い。

資料として挙げた練馬ボランティアセンターの機関紙「ほけっと」で、ボランティア活動そのものとボランティア学習をわけて考え、対応していくことを明らかにしたところ、特に学校関係者か



らの問い合わせが複数あった。

「ボランティア活動」は、自分自身の人生の中から課題を見つけ、それを解決するために、自ら決定して実行していく行為である。しかし、学校の先生などから「学生、生徒にボランティア活動をさせたい」として相談があるのはほとんど「ボランティア学習」である。先生に言われたり、宿題として個人で相談に来る生徒も多い。気持ちはわかるが、子どもたちがどう捉えているのか疑問である。嫌々ながら来られると、受け入れている現場もとまどう。

・「体験学習」で何を学ばせ、どの方向へ導きたいのか

先生たちはカリキュラムの工夫が必要ではないだろうか。学習である以上、教育の一貫であり、体験学習によって子どもたちに何を学ばせたいのか、という方向性があるべきである。

練馬ボランティアセンターでは、「支援協力事業」という事業項目を設け、学校と企業の体験学習などへの協力を行っている。資料に挙げているのは、昨年度の支援協力事業の実績であるが、見ていただくとわかるように、福祉教育分野の協力を行っているのだが、手法がほとんどなく、講義か体験の二通りしかない。環境教育や国際理解教育の分野から見ると、はるかに遅れを取っている。

先生にプログラムを作るに当たって、ぜひお願いしたいことは、事前に現場に相談して欲しいということである。実際の現場を知らないまま、プログラムを完成して、期日も内容も決めて相談を受けても、子どもたちに何を伝えたいのかということ考えたとき、実態とかけ離れた内容になっていることも多く、受け止めきれないことも多い。例えば「老人ホームを見学したい」と言っても、老人ホームはお年寄りが毎日生活している「一軒の家」であるという認識がどれだけあるのだろうか。

また、同じように体験学習をしても子どもによって感じ方は違う。感じ方が違うのは当たり前であり、先生は答えを出すべきではないと思う。実際に私の目の前であった話だが、生徒を数人連れてボランティア活動についての話を聞きに来所し

た先生が、職員が一通り説明をした後をまとめて「かわいそうな人たちのために君たちもなにかをしてあげよう」と言ったときには、本当にがっかりした。人と人の対等な関係から生まれるボランティア活動の説明をしたつもりであったのに、これまでの説明は何だったのだろうと考えてしまった。すぐに自分自身の判断基準でまとめをしてしまうのは、先生の悪いくせである。

最後にぜひお伝えしておきたいエピソードがある。最近海外支援の活動をしているNGOと一緒に研修を企画して、実施した。そこに参加してきた高校生の女の子がとてもしっかりしているので、どういう子なのだろうかと思っていたところ、中学校時代の社会科の先生との出会いを話してくれた。その先生は社会科の授業中「私は教科書に載っていることしか教えられない立場にあるが、君達にどうしても知ってもらいたいことがある」と言って、戦争中日本が韓国や中国に対して何をしてきたかを、紹介する本を通して伝えた。今回の研修に参加してきたのはその流れの延長線なのだという。

この先生はすばらしい先生だと思う。教育というのは答えを教えるのではなく、子どもたちが自分自身で考え、答えを見つけていききっかけや方法を伝えることなのではないだろうか。

#### ◇問題提起

国際協力の現場から一村人による森林保全への取り組みから学ぶ

磯田厚子（日本国際ボランティアセンター）

#### 1. 民間国際協力団体は日本での活動も重視し始めている

日本国際ボランティアセンターは、国際協力型NGOの代表的な団体である。現在アジア、アフリカ、中東、中南米など世界8カ国で活動を展開している。現場各地で人々と深く関わりながら、抱える問題の解決を目指そうとすればするほど、大きな問題にぶち当たる。問題の根が彼らの側ではなく、先進国側、私たち日本側とのつながりに

あることに否応なく気付かされるからである。しかもその根は非常に深く重い。

このような認識のもとに、NGOはここ数年来、単に海外での協力活動を行うだけでなく、日本国内で暮らしや産業のあり方を考える仲間とつながりを作ってきた。日本政府や国際機関の援助・開発政策への提言、世論作り、政府との対話なども積極的に行うようになってきた。

例えば、カンボジアの和平成立後、日本政府からの数億円規模の農業援助に対し、カンボジアで活動する日本のNGOが中心となって再検討させた。農業専門家、農薬専門家、弁護士などの協力を得、実情調査や当該政府との意見交換を行った。農業が必要とされる虫害が殆どないこと、現地に環境法が整備されていないことなどを、日本やカンボジアの政府や世論に訴えた成果だ。しかし、このような成果の見える例はまだ少ない。

NGOも、国内活動を展開する余力やノウハウがまだ乏しいのが現実である。すでに環境問題に取り組む団体、日本の生活のあり方の問い直しを行っている団体との連携が大きく期待されている。

## 2. ラオスの森林が狙われている

インドシナ地域の開発が、市場開放政策とベトナムへの経済制裁解除が契機となり、急激に関心を浴び、多くの投資や経済開発計画が持ち込まれつつある。特にラオスには世界的にもまだ豊かな原生林が残っており、最大の投資産業は森林伐採や製材事業である。樹齢数百年、胸高直径1メートル以上のヒバ（ラオスヒノキ）、マツ、ビルマカリンなどがどんどん伐られている。数万ヘクタールの数十年間の伐採権を獲得し、樹種を問わずに1立方メートル当たり数千円で契約している外国業者もある。台湾、タイ、韓国等とならんで日本が主要輸出先である。主に高級建材、神社仏閣建材、高級家具などに使われる。フローリング床などにもなっている。

第2に問題なのは、水力発電ダム建設である。日本の本州程の大きさの国に、現在、100以上のダム計画がある。自国の電化用ではなく、ほぼ100%タイに電力輸出する。合意書が交わされたダム

計画によって、この2年ですでに5万ヘクタール以上の森林が皆伐に近い状態となった。資金めどがないにもかかわらず、既に大規模伐採の進んでいるナムトゥン第2ダム水没予定地もある。木材はこれまた上記の通り輸出される。輸出電力はタイの工業地帯の電力需要に応じるものだ。つまり、多くの日系企業の需要のために、ラオスの森林が消失していることになる。

第3の問題はユーカリ植林だ。タイ企業やアジア開発銀行の開発融資などにより、ユーカリ植林が伐採跡地などで進行している。すべてタイのチップ工場などへの売買契約によって植えられたもので、ほぼ全てが日本の製紙会社に買い取られ日本で紙となる。

## 3. 自然に抱かれた暮らしの豊かさと持続性

ラオスは確かに経済的には最貧国の1つであるが、その自然や自然と共に暮らす知恵の点では、世界有数の豊かな国といえる。中型ウシの新種がラオス・ベトナム国境でつい最近発見されるほど、豊かな自然が、外部の人間による侵略なしに残されてきた。人々の生活は、主食の穀物とわずかの香辛料を栽培する以外は、大半の生活資材を森林資源に依存している。とりわけ、副食物の全ては森や川からの狩猟・漁労・採集によっている。

伝統的な民族社会では、村毎に森林を保有し、保護しながら上手に使ってきた。その1つ、精霊の宿る森では、木を伐らないだけでなく採集も禁じて、数十年に渡り保護する。村人は信心深くその森を守っている。他村が掟を犯した時は罰則として水牛何頭を渡す、双方の村の長老らが和解交渉するなどの、慣習法がある。

森林の有難みを切実に感じ、かつ、有効に活用しながら保護してきたのは、普通の村人たちである。これは、世界に誇れるほどの、自然環境と調和した持続的な暮らしのあり方を体現している。「環境教育」ということが不要なほど、感性と心と知恵に裏打ちされた豊かさであるといえよう。

## 4. 村人が森の保護に立ち上がった

以上のような問題認識の上に立ち、日本国際ボ

ランティアセンターでは、村人による森林保全（Community Forestry）の活動を支援している。ラオスの行政では、森林保護を行うのは専門の勉強をした林務官の役割という考え方になっており、村人は森を荒らす人という捉え方をされがちであるが、実態は、村人こそが森を守ってきている。このことを村人自身が再認識することが非常に重要である。村人が自信を得た発言するようになることによって、行政も村人の役割と権利を認めるようになっていく。このようにして、現在、活動は19村に及び、うち2村ですでに森林局に「村の森」を認定させ、村人による保全委員会でルールを作って保全する事が認められた。他村でもこの取り組みに弾みがつき、さらに学びあい、よりよい森林保全に向けて共に取り組もうという主体的な動きが始まっている。

## 5. 日本で何をすべきか

ラオスに起きつつある問題と日本の産業や暮らしのあり方との関連をみるにつけ、前述の通り、日本国内への訴えかけの必要を強く感じ、講演会や学習会を実施している。インドシナ問題への関心は高く、参加者は多い。何度も参加する人もいる。しかし、非常に残念なのは、勉強してそれで終わりがちであることだ。自分の行動を変える、あるいは他の人にも伝える、などにつながらないことである。ラオスの森林破壊は現在進行形でどんどん進んでいる。今、なにかしなければならぬ。そのために、共に行動してくれる仲間が増えることを期待して、これら後援会などにも時間を割く。単なる勉強のための勉強では、ラオスの森は、待ってられないのである。

### ◇問題提起

環境教育のひろがり、可能性と共同を探る

田中敏久（日本環境教育学会学校教育ネットワーク東京事務局）

#### 1. 今、子どもたちは？

今の子どもたちの〈体験不足〉は、どれ程強調

しても言い足りないということはない。

筆者の勤務地での調査では、小学校高学年の子どもたちが放課後や休日などに身近にある公園などに行く回数は、友だちの家やスーパー・コンビニ、習い事の場所などに行く回数と比べて、1/2～1/3程度に減ってしまう。

また、よくする遊びを選ぶ場合でも、中学生がテレビ・ビデオを見る割合は、スポーツをする割合よりも高く、テレビゲームをする割合まで入ると2倍以上になる。

また、小学生から中学生までの間に、(学校で)草花を育てることはほとんどすべての子どもが経験するが、虫や生き物などを育てることは、教材となるもの以外は10%以下の子どもしか経験したことがないと答えている。

そして、ほとんどの子どもたちが、身近な環境に対しても、身近にあっても興味・関心の対象とならなければ、〈あれども見えず〉の状態のまま成長していく場合が多いと思われる。

また、少子化や地域環境の都市化などによって、地域の自然的環境を生かした集団での遊びはほとんど姿を消してしまい、都市型の環境に適応した比較的少ない人数でも行えるような外遊びやファミコン・テレビゲーム等の室内での遊びが中心となったことで、子どもたちの情緒的発達や人間関係作りなどの面でも支障が出ていると思われる。

(このような状況に対して、今日、そして近い将来の学校が何をなさなければならないのかについて、学校や教育の関係者の真摯な問いかけが必要な時代は既に始まっていると思われる)

#### 2. 今、学校・先生は

そのような子どもたちに対して、先生たちも意識の上では〈環境教育の必要性〉は自覚している場合が多いと思われ、教育関係の雑誌等で特集が組まれたりすることもままあり、〈学校における環境教育〉の実践事例等の書籍数も増えてきており、既存の教科のねらいや考え方を残しながらも、環境教育的な方法での実践などもなされてきている。

また、いわゆる〈新しい学力観〉との関連で、

平成元年から全国で実施されている生活科に代表されることなく自然体験や生活体験・社会体験>を重視した身近な地域での体験的学習としての環境学習の試みがなされる場合も多くなってきた。

また、文部省の教育課程開発の研究指定校等では、地域や地球的規模での環境教育を視野に入れた新しい教科の案やカリキュラム試案に基づいた学習も行われてきている。

更に、<地域に開かれた学校>を目指して、社会教育団体やPTAとの連携の下に、地域における課外の活動としての<エコボランティアスクール>などに取り組む学校も出始めており、環境庁などが進めている<子どもエコクラブ>の活動に全校で取り組んでいる学校もある。

筆者も、ボランティアの立場で児童館主催の<善福寺川子ども探検隊>の企画・運営に参加してワークショップを担当したり、環境庁等共催の<環境教育シンポジウム'95>の地域会議の実行委員や全国会議のファシリテーターとして活動してきているが、このような教師個人のボランティア活動も広まり始めていると思われる。

### 3. お二人のお話を聞いて

お二人の話しを伺って最初に思ったのは、何よりも<つながり>ということだった。

一つには、どちらの場合でも、福祉教育や環境教育の一環として、学校の子どもたちが活動現場や活動内容の面で直接的に関わりがあるという点。

そして、恐らくは一寸目には分かりにくいその<つながり>を、子どもたちにも見えやすくしてあげるために、私たちのような大人が今回のような活動を通して繋がり合うことが必要だという意味での<つながり>の必要性。

そして、そのつながりを子どもたちや私たちが理解するための<感受性>や実際に感じるために<体験>することの必要性が次に思ったことだった。

このどれもが、今の(学校)教育に求められていて、なかなか実現できないでいることではあるが、今回のシンポジウムのような取り組みを重ねていくことで、少しずつ実現に向けて努力してい

きたいと思う。

参考：〈感性の教育〉としての環境教育

『学校でできる環境教育』初等教育研究会研究紀要より 1995.2.17 於 筑波大学附属小学校

1. <小学校における環境教育のねらい>と考え方(図2 〈ねらいと内容の構造モデル〉参照)

(1) <環境に対する感受性の育成>

- ・身近な環境(自然的・社会的・文化的環境)に対する感受性を養い、環境や環境問題に対する興味・関心や心情を育てる。
- ・「ワァ〜・ヘェ〜・スゴイッ!」という声や反応を子ども達から引き出し、<あれども見えず>の身近な環境の存在やそのすばらしさ・問題点に気づかせる。

(2) <環境理解の深化>

- ・自分と環境との関わりや環境の仕組みに対する見方・考え方を養い、環境の現状や環境問題について理解を深める。
- ・「アレ? オヤ?」を「ナルホド!!」に高めるために環境に関わり、調べる。

(3) <判断力・行動力の育成>

- ・<環境全体>に対する適切な判断力を養い、環境保全や環境問題に対して、主体的に関わっていかうとする意欲や行動力・実践力を育てる。
- ・「ウ〜ム…」とみんなで考える場面を投げかけ、「ヨーシ!(やってみよう!)」という積極的に関わる態度を育てることをめざす。

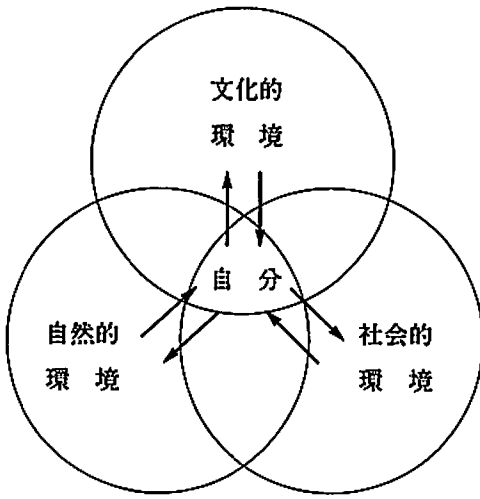


図1 《子どもたちにとっての環境》

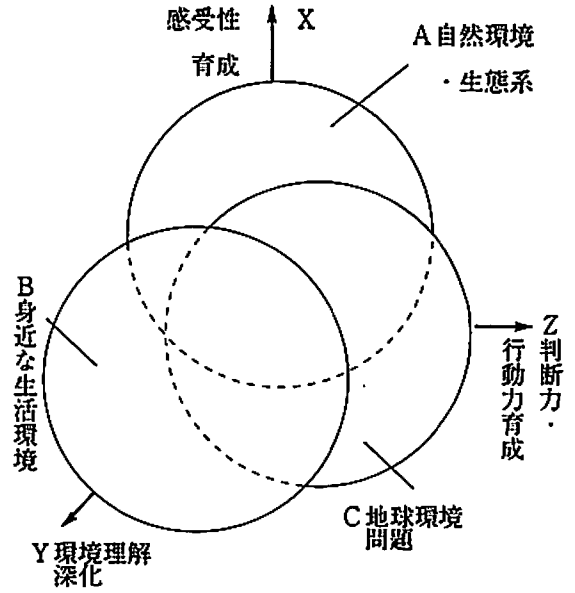


図2 《ねらいと内容の構造モデル》